初めて高知へ行ったとき

岡田静子

海と言えば学校から海水浴に行った須磨海岸より知らぬ私が、初めて太平洋の荒波を知ったのは、昭和五年八月一日でした。主人に連れられて生後六ヶ月の長女を抱いて神戸港から高知丸に乗りました。はじめはおだやかな船が次第にゆれはじめ、船員が「今夜の室戸湾は波も静かですからゆっくりお休み下さい」と言いました。波は段々荒くなり、長女を抱いて横になった私は身体ごと、あっちへごろ〳〵こっちへごろ〳〵ころがり、眠るどころではありません。すっかり船酔して苦しみ労れ果てました。何時間か過ぎて「高知湾が見える甲板に出て見ないか」と主人に言われ子供は主人に抱かれふらつき乍ら甲板に出ました。夜がほの〴〵と明けそめていましたが船はゆれていました。「左手が桂浜だ、坂本龍馬の銅像があれだ」と教えられあゝ高知へ来たのだなあと思い、須磨で陸からの海は見ていましたが船上から陸を見るのははじめてで高知とはこんなに遠く、えらい旅なんだとしみ〴〵思いぐったりしました。主人は船酔もせず船内の朝食も致しましたが、私はそれどころではありません。やっと上陸し朝日の射す道を歩くうちに船酔も治って来ました。ちん〳〵電車が通っていました。私には命がけの船旅でした。駅に荷物を預け墓参しました。墓地はひじまりに在り、ひじま橋を渡り、田圃道をかなり歩きつきあたりの小高い山にあり、近くの花屋で花を買い、バケツの水、杓、箒も貸して貰い、墓を掃除し、花をたむけ、水をかけて静かに拝みました。主人には十何年振りかの墓参で念願が適えられ、安堵の様子がうかゞえました。その辺の田圃では稲刈をしていました。まだ八月二日というのに何故ですかと主人に聞きますと、高知は年に二度米がとれるので、土用のうちに二度目の田植をせねばならぬと言い、何と農家の忙しい事だと、二期作をはじめて知りました。

次に高知城に登りました。教科書で習った、山内一豊の城です。はるかにかゞやく海が見え何と雄大な景色で、四囲の眺めはすばらしいものでした。城内に梅の段、桃の段、桜の段とあり、広い梅林桃林桜林の花の頃は市民は家族づれで、弁当持ちで終日楽しんだそうです。勿論主人も両親につれられ兄弟姉妹喜びいさんで来たそうで、なつかしげに暫く佇んで動きませんでした。城の濠には白やうす桃色の蓮の花がたくさん咲いていました。初めて見る蓮の花の優美さは又格別でした。

次に朝倉町の生家の跡を訪ねましたが、家は建ち変り昔のおもかげもなく、何と淋しかった事でしょう。主人はとある小さい煎餅屋にはいりました。先方は驚いて、「岡田じゃないか、久しぶりじゃのう、よう帰って来た、勝やげんすは何うしとるけん」「勝はゴム会社に、げんすは銀行に行っとるけんのう」「妹が居ったじゃろう」「妹二人はまだ女学校じゃ、女学校ば、出とらんと神戸では女中か子守しか行けんきにのう」「そりゃ大変じゃ、わしんとこも、おやじが死んでそのあと、煎餅焼いとるんじゃ、わしの焼いた煎餅食うて呉れんかのう」と、やがて奥さんが白紙に煎餅を包んで下さいました。小学校の仲好しの友達で、その話し振りの何と親しげな様子に、私は高知人の人情を知り、旧友とはこんなに良いものかと感動しました。勝は岡田勝虎で、げんすは、岡田元司で、後に勝虎は、日輪ゴム工業株式会社の東京店に、元司は上海支店に勤め三兄弟とも鈴木商店のお世話になりました。

水道町二丁目に来て「こゝが金子直吉様のお家だ」と教えられました。東西十二三間もあろうかと思われる、べんがら格子のしもたやで、奥行の程は大きくて分かりません。立派な座敷、庭もある事を想像しました。立派なお屋敷に唖然としました。主人は十五才の時母が亡くなり、貧しいが学業も性質もよいと金子直吉様に拾われたのです。主人の父は、近衛兵に入隊し、日清、日露の戦争に征き、凱旋し高知市から記念の盃を頂いております。家業は染物屋でした。紺絣の着物に羽織を着て、草履をはき、持物としては日本手拭一つ、肌着の一、二枚で金は持たすなという事であったそうです。そして鈴木商店にお勤めし、夜学で勉強させて頂いたのです。

高知から安藝まで鉄道で、そこから田野町に行きました。こゝに主人の姉の嫁ぎ先があり、昔、高知から田野まで人力車で嫁入りしたそうですが、一人の娘をおいて若死にしました。姉の主人は町役場に勤める人で、こゝでも墓参をし、親類の人達に手厚くもてなされました。

その後私は三人の母となり、墓参も度々いたしました。美しい思い出がたくさんありますが、又の事にいたします。

葉隠の地佐賀より わが鈴木商店の血消える

北野浅美

佐賀市のど真ん中、わが鈴木商店の経営なりし旧佐賀紡績㈱（昭和三年錦華紡績㈱へ併合、現大和紡績㈱佐賀工場、敷地三万坪を超え盛時一千名を越す従業員を擁した）綿紡一本の時流に抗し得ず、既に操業停止人員整理の上廃業、県と市へ土地売却の手順と聞く。

小生帝国麦酒（サクラビール）出身親会社の鈴木商店への愛着一入、従って現在佐賀市に住みて四〇年現大和紡の周囲を通るときこれが昔は鈴木商店の経営だったと思えばそぞる懐しさの湧くは当然のこと、跡は公園になるか何になるかは不明なれど工場の影さえ無くなるは言を俟たず。

まもなく消えゆく、あれこれ想うときその淋しさ隠しおうせず、敢て掲題駄文を草する次第です。

昭和六十二年十月十四日

退任のご挨拶

松下重男

明けましておめでとう存じます。本年は辰歳、辰巳会によい年かも知れません。

さて私儀、昨年退任致しました。在勤中は公私にわたりご愛顧を賜わりまして有難く厚く御礼申し上げます。

人生意義ある輝いた時期であったやに思考致され感謝致して居ります。

事務局の仕事の後任には、南前義夫氏が就任されました。よろしくお願い申し上げます。

今後は健康に留意致し、長寿番付の最下位に載せて頂けるよう存じて居ります。以上簡単乍ら、誌上にてご挨拶申し上げます。有難う存じました。

鈴木商店 漫画雑誌ＪＵＭＰに連載

漫画雑誌ＪＵＭＰに次頁の通り4回シリーズの2回迄の見出しをのせました。後の2回は次号に掲載の予定をしております。

私共の鈴木商店の歴史については、会長の御挨拶にもありました通り、昨年各方面で注目を集めておりますが、このような漫画雑誌に取上げられたことは興味を持たれるものであり、ここに御紹介すると共に皆様方の御感想を御伺いできれば幸甚と存じます。

尚、内容の詳細について紙面の都合により割愛させて頂きます。